

小中学生作文コンクール 審査員特別賞受賞作品

「言葉の魔法」

川口市立領冢中学校 三年 吉田 愛梨

幼い頃目が悪かった私は、二歳の頃から眼鏡をかけ始めた。その頃の記憶はあまりないが、昔の写真を見てみると、ピントの縁の顔の半分の大きさもある眼鏡であった。しかし、物が良く見えることが嬉しかったので、自分から眼鏡をはずすことはなかったそうだ。お風呂のとき、眠るとき以外は、いつもつけていた。

幼稚園へ入園する前の半年間、近くにある児童館で、週二日、近くに住む子供たちが集まって様々な遊びをした。そのとき、遊んでいる子供たちの中で眼鏡をかけているのは、自分一人だけだということに気が付いた。そのとき、初めて不安な気持ちになったことを覚えている。父も母も眼鏡をかけていない。どうして自分だけなのだろうと思ったが、何だか聞いてはいけないことのような気がして、聞けなかった。

ある日、朝から具合が悪く、病院へ行った。その帰り道、見知らぬ女性に、「まだ小さいのに眼鏡をかけているの？」

と声をかけられた。母がはい、とだけ答えると、その女性は、

「あら、かわいそうに。」

と悲しそうな顔で私を見た。母の顔も悲しそうだった。

入園の一週間前、いつもの様に児童館へ行くと、初めて見る女の子がいた。その子は私を見つけると、すべに駆け寄っておい、

「一緒に遊ぼう。」

と言った。そして、私の顔をじろっと見て、

「おめめがキラキラきれいなのに、なんでこれつけているの？」

と私の眼鏡を指差して言った。何だか嬉しい気持ちと驚きで何も言えないでいるよ、彼女はそれ以上何も聞かなかった。

言葉は、一度口に出してしまつて、文字と違って取り消すじじがびきまない。文字のオチに消して消してやり直すじじがびきめるのなら、どんなに便利だろうと思う。

言葉は、他人の人生を変えることになったり、深く傷つけたり、励ましたりもする。やり直すことができない言葉ならば、人を悲しませたり、傷つけたりするものではなく、人を幸せな気持ちにする声かけをしていきたいと思う。病院帰りに出会った女性 は、今思うと、眼鏡をかけていた小さな私のことを心配して言った言葉なのかもしれない。児童館で出会った女の子とは、地元を離れてからも親友で、知り合ってから今年でちょうど十年になる。お互い中学生になってからは、部活動や勉強で忙しくなり、長い間会えないときもあった。しかし、久しぶりに会ってもいつも笑顔で駆け寄り、すぐに手を握ってくる彼女が大好きだ。

「眼鏡かえたんだね。似合うよ。」

と彼女は魔法の言葉をくれる。そのお返しに、私はありったけの笑顔を彼女にあげる。